全カリ Newsletter No. 36
2014.9.22
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

鼎談　～全カリ・次のステージへ～

参加者
佐々木一也（全学共通カリキュラム運営センター部長・文学部教授）
小泉　哲夫（全学共通カリキュラム運営センター副部長・理学部教授）
京角　紀子（教務部全学共通カリキュラム事務室課長）

佐々木 一也

○小泉（司会）　2014年４月に全カリ部長、副部長、課長が一斉に交代しました。新体制になりましたので、今一度、全カリの歩みを振り返るとともに、2016年度のカリキュラム改革について、お話をお聞きしたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。

全カリとの関わりを振り返る

○小泉　はじめに、簡単に全カリと今までどういう風に関わってきたのかをお話いただければと思います。私は、全カリがスタートして２年後の1999年から２年間、理学部選出の運営委員を務めました。当時は各学部から運営委員が出ていて、夜遅くまで議論をしていました。2004年度には、特別教務委員として「多彩な科目」の骨組みを作りました。現在の主題別Ａ科目の５領域は、我々の委員会が基礎を作ったんです。

昨年度には総合チームメンバーになりました。これが10年ぶりくらいに復帰した形になったんですけれども、以前とは運営組織がだいぶ変わっていましたね。そして今年度から、副部長という役職をやらせていただいております。

○京角　私はもう勤めて30数年になるんですけれども、そのうち、理学部の教務課、教務事務センター、自然科学系事務室、とトータル15年は教務部で働いていました。

○佐々木　キャリアの半分近くが教務なのですね。

○京角　そうです。どの部署にいた時も、全カリとの関わりはありましたので、全カリ事務室にお邪魔する機会は何度もありました。いつも皆さん忙しそうに働いて、でも楽しそうで。その輪の中に先生方も入っていらっしゃるというような、そんなイメージを持っていました。

○小泉　佐々木先生は、一般教育部のときからずっと関わられていますよね。

○佐々木　私が全カリに最初に携わったのは1994年の12月です。1989年に立教の一般教育部に着任し、その２年後の91年に大学設置基準の大綱化が起こりました。93年度に研究休暇を取っていたのですけれど、94年の３月に帰ってきたら浦島太郎状態。一般教育部が炎上していました。

○小泉　あの時はすごかったですね。

○佐々木　その後、一般教育部の有志と当時５つ（文・経済・理・社会・法）だった各学部の有志が一緒になって、新しい教養教育を担うための活動を進めました。

その当時、学校・社会教育講座に寺﨑昌男先生がおられました。寺﨑先生は最初立教に着任され、それから東大に移られ、教育学部長や付属中等教育学校長などを歴任され、定年を迎えられた後、再び立教に戻ってこられました。寺﨑先生は大学教育、日本の高等教育論、教育史の研究分野では第一人者ですから、当時の塚田理総長が「新しい教養を立教で作ってくれ」と大いに口説かれ、1994年12月に寺﨑先生を初代センター部長として運営センターが立ち上がったのです。

あわせて要員が何名か呼ばれたのですが、その時どういうわけか私が呼ばれました。寺﨑先生のことはもちろん存じ上げていましたが、お会いしたのはその時が初めてで。当時はライフスナイダー館に総長執務室があって、そこで寺﨑先生に引き合わされ、専門委員を委嘱されました。まだ一般教育部もあったのですが、一般教育部はカリキュラム責任を免ぜられ、全カリ運営センターが一般教育の責任を担うことになりました。翌年1995年の３月には一般教育部は廃止になってしまいました。一般教育部の教員の分属先が同時進行で決められて、全カリの仕事も始まって…てんやわんやでしたよ。私も文学部に行き先が決まって、４月からは文学部の教育学科に形式上所属しました。

○京角　形式上とは。

○佐々木　文学部の科目を持っていませんでしたから。実際は一般教育課程の仕事をしていました。でも、その中でさらに一般教育課程のカリキュラムに関する仕事を与えられている教員と、ただ授業をやるだけの教員に分かれたのです。カリキュラムを考えたり、運営したりするのは全カリ運営センターの教員。教えるのは旧一般教育

目　次

鼎談　～全カリ・次のステージへ～ ……佐々木一也／小泉哲夫／京角紀子（1）
新メンバー紹介 ……浅妻章如／和田　亨（5）
授業紹介 ……栗林ゆき絵（6）
大学教育学会参加報告 ……林　英明／飯塚琴乃（7）
2014年度全学共通カリキュラム運営センター名簿 ……（8）

部の教員。全員が全カリの要員になったわけではないのです。ここが難しいところで。そういう状態でしたので、当初の２年は一般教育部のルーティンの運営と、新しい全学共通カリキュラムの設計を同時にやっていました。

○京角　スタート時はそういう状況だったんですね。

○佐々木　当時は卒業要件の124単位中54単位くらいが一般教育部の単位でした。１・２年の教育責任を負っていたのだから当たり前ですが、それは学部からしたら異物感があった。だから一般教育部が解体されたら、単位数、人員を大幅に削減し学部に分配する。そういう考え方が当時は強かったのです。

一般教育部の解体

○小泉　まず一般教育部の解体というところから話が出ましたね。

○佐々木　一番激しく議論されたのは英語についてでした。それまで、英語の授業の主流は訳読でしたから。時代遅れだし、理学部の学生にシェイクスピアを読ませるのもねぇ。だから英語はドラスティックに新しくする、使える英語を教えるんだとずいぶん言われました。その当時の全カリには人事権があったので、高い英語運用能力を持つ教員を全カリで採用しました。それで以前からいた言語の先生がつらい目にあってしまうというようなこともありましたけどね。そういうなかで私は、1998年３月まで、専門委員を３年と４ヶ月ほど務めました。

○京角　一番激動の時期ですね。

○佐々木　そうですね。物理学科の田中秀和先生と二人で総合科目の専門委員をやっていました。私は人文社会系、田中先生は自然科学系の担当でね。当時は総合にも教育研究室があって、専門委員を辞めた後も、人文科学教育研究室の室員はずっとやっていました。室員を辞めたのは2006年くらいかな。そういう全カリとのお付き合いでしたね。

全カリ組織の運営体制を振り返る

○小泉　全カリ立ち上げの頃は、現在の組織形態とはずいぶん違いますね。どのような運営方式だったのですか。

○佐々木　５学部から２人ずつ（言語と総合）、10人が選ばれて、役割を分担していました。運営センター委員会は10人全員が揃うところで、教授会に相当するものでした。委員たちは大物ぞろいでしたよ。まだ全カリは形が十分に定まってはいなかったので、学部の肩入れによっては自分の学部にひきつけたような形でできるかもしれないという期待があったんですね。だからどこもエース級を投入してきました。

○小泉　毎回毎回夜遅くまでやってましたよね。

○佐々木　当時、会議が18時過ぎにスタートだったので、22時は当たり前、24時を過ぎてタクシー券が出たこともありました。

○京角　今とずいぶん違いますね。

○佐々木　活気がありましたね。皆さん、本気で全カリをどうするか、他人事ではなく、自分のこととして考えてくれていました。

京角 紀子

○京角　先生方の熱心さが必修科目や単位に反映されているイメージがありました。

○佐々木　総合科目でも、学部によって領域の指定単位数が違っていましたね。

○京角　学部と一緒に全カリを作るという。

○佐々木　全カリはお仕着せではない、カスタマイズできる、という考え方でやっていたんですよ。そのかわり運営になると大変でしたよね。

○小泉　そういう意味では効率が悪かったですね。

○佐々木　毎週定例の会議が３～４つあって、ほかに広報や教務の業務があって。だから全カリをやっている間は学部の業務は外してくれって全カリ部長がお願いしたこともありました。

○小泉　全カリ運営センター委員会は教授会と同じですからね。教授会に毎週２回出るようなものですものね。

○京角　皆さんの熱意で成り立っていたんですね。

○佐々木　私が務めていた専門委員は、ほとんど全部の会議に出るんですよ。さらに全カリ事務室で下準備を職員と一緒にやったりするので、一日を事務室で過ごすこともある。しかも、そこにいる教員と話しているうちに盛り上がって、喧々諤々の議論になって事務室から出られなくなったり。

○京角　すごくエネルギッシュですね。そういうことがあったから、いまの全カリ運営センターがあるんですね。

全カリは「運動体」

○小泉　よく全カリは運動体だと言われますね。その辺についてはいかがですか。

○佐々木　立ち上げの時は、皆さん、役職に就いたからやるのではなく、やらなきゃいけないと思って動いていた。だから、運動体として動いていたのだと思います。よりよいものにしようと皆思っていた。それだけ当時の現状に不満もあったということですが。

○京角　その時に大事にしたいものがあったと思うんですけれど、それはやはり学生の教育という視点から生まれていたのでしょうか。

○佐々木　全ては学生のため、というのと、全カリは公だという意識がありました。全カリは５学部合意の上でやっていることだから公なんだと。この考えは、例えば時間割を作成するときなどにものをいいました。各学部の時間割を作成するとき、まず最初に全カリ言語科目を入れてしまうんですね。

○小泉　全カリ必修が最優先ですからね。

○佐々木　そのあと空いているところに専門科目を入れる。こんなことできる大学ってそうないと思いますよ。当時、寺﨑部長は各学部に、全カリを自分たちのカリキュラムだと思ってくださいと、よく宣伝していました。教授会に出向いて話をしたこともあったと思います。でもそれは必ずしも十分には定着しませんでしたね。

○小泉　今でもそうですね。

○佐々木　学部が全カリを自分のカリキュラムとして認めるということは無かった。それがいま、ついに学士課程統合カリキュラムが構想されている。目指すのは学部と全カリが統合するカリキュラムです。

全カリ科目を担当することの楽しさ・難しさ

○小泉　学部では、全カリに理解のある人が全カリを担当するという流れになってしまっていますね。

○佐々木　2000年代の初めくらいは、全カリを担当するのは面白いと思ってくれていた人も多かったように思います。例えば総合Ｂ、いまの主題別Ｂですけれども、先生同士が議論を交わすようなものを新鮮で面白いと思ってくれたり。でも、そういう先生も年配になって、若い世代の先生は全カリの良さを体験する機会が無いままだったりするので、よくご存じないままに過ぎてしまっていると思います。

○小泉　特に今は組織が変わって、全カリ委員会が部長

会と事実上一緒になったので、教員からは、全カリがよく見えなくなってしまったというのがありますね。立ち上げ当時のことをよく知らない人が増えてきた。全カリは別物というか、よくわからない、と若い人は思うのかもしれません。統合カリになることで、そういった先生方の意識も改革できればいいのではないかと思います。

小泉 哲夫

○佐々木　全カリのような教養科目や他の学部・分野の学際科目的なテーマで行うとなると、自分の専門分野の知識だけではなく、ほかの分野を勉強したり、他の人に話を合わせないといけない場面があったりする。講義形式でも、履修者の専門がバラバラなので、自分が当たり前だと思うことを喋っても全然通じないこともある。だから配慮して授業する必要がある。

○京角　授業の準備は大変ですね。

○佐々木　他学部の人も聞いてわかるように、という配慮が非常に重要です。そういうことが、少しとっつきにくいと思われる一因かもしれません。

教養と専門

○佐々木　いま、教養という概念が曖昧になってきていると思います。「教養はいらない」という人はいないでしょうけれど、ではどんな教養を持っていれば「教養人」といえるのか、というのは人によってイメージが違う。私は古いイメージを持っているから、芸術から科学まで理解があって、それらがその人の個性を作り出している、というのが教養人だと思っているのですが。

○小泉　最近は学問が専門化していますからね。

○佐々木　だから専門の勉強をしている人から昔のようなイメージの教養人が出てくるのは難しいのかもしれませんね。

○小泉　深く掘り下げるほど隣がわからなくなりますね。

○佐々木　教養の概念が成立しにくいという背景もあります。ヨーロッパやアメリカは、リベラルアーツという中世以来の知の基本があって、その上に専門的な学問が築かれてきたという強い自覚がありますよね。でも日本の大学にはそれが無い。西洋の大学にはリベラルアーツがあるけれど、それがないまま西洋の大学の制度だけを持ってきてしまったようなものです。

昔は大学で西洋の言葉と教養を身に付ければ日本の指導者に、エリートになれた。でも今はそれもインセンティブにならない。だから教養ってなんだろう、と思ってしまうのが現状でしょう。

教職協働について

○小泉　全カリの運営には、教員だけでなく職員の協力も大事だと思うのですが、これについて京角さんから少し話していただけますか。

○京角　全カリ事務室は、全カリのカリキュラム編成や運営をサポートする教務部の組織ですが、「全カリ運営を支えるマネジメントの役割」が業務の前面に位置づけられていて、これが、全カリ事務室の大きな特徴だと思います。全カリには専属の教員がいないこと、また役職についていらっしゃる先生方には任期があるので、職員は業務の継続やもっといえば全カリの理念をも継承したうえで、全カリの運営にかかわる必要があるからだと思います。例えば私が自然科学系事務室で働いていたときは、先生方が教育・研究・管理業務をやっていらして、その支援として学内情報を収集したり、学部の会議に陪席して学部の動きを理解しながら学部運営のサポートをしたりしたつもりですが、学部には専属の先生方がいらっしゃるわけで、継承性があります。でも全カリには専任の先生がいらっしゃらない。部長も、支えてくださる先生方も交代されていく。だから職員が先生方をマネジメントすることが必然的に求められるのだと思います。

全カリ事務室に着任し３ヶ月経って思うのは、課員たちは大学の動きを察知して、それが全カリとどう絡むのか考えながら働いているな、ということです。「文科省ではこれが今問題になっているんですよね」とか「ルーブリックってこんなものです」とか、課員が教えてくれるんです。本当にありがたいですし、それがすごく自然なんですよ。職員も、先生方に説明するのには、まず自分たちがきちんと理解する必要があると考えていて、大学教育学会に参加させていただいたり、全カリの広報紙を執筆したりします。今後も先生方と良い関係を保ちながら、全カリ、ひいては立教の教育を先生方と一緒に考えていきたいと思っています。

○佐々木　全カリは設立最初から教職員の関わりが深かったですね。職員には教員を説得する力があり、教員も職員に言ってもらって初めて自分たちにできることがわかるような感じで。教養教育専門の先生はいないので、先生も手探りでやっている。だから一緒にやることができる。教養教育では、学部教育のように強い専門性を発揮できないので、皆で考えざるを得ない。そうすると、職員が参加できるというか、参加が求められるわけです。

○小泉　全カリの職員は単なるサポートではなく、一緒に考えていくという姿勢が非常に強いので、ありがたいですね。

○京角　毎週開催される様々な会議で色々な資料が配付されますが、そこに至るまでには職員が先生の生の声を拾い、問題を整理して先に進むということを自然にやっている。例えば総合科目のカリキュラム改定のなかで、サポーターの意見がもっと必要だよねと先生が言及されれば、職員はすぐにもサポーターの先生に会いに行って状況のご説明をする。言語の改革においても、しかり。大学全体を見据えて動いている。

○佐々木　教員たちが考えたアイデアの一端を補って、完成形まで作ってくれるような存在ですね。

○京角　職員をそうさせる要因のひとつに、自分たちには現場が無いということもあります。先生方は学生と接する教室という現場を持っているけれど、職員にはそれが無い。ですから先生と協働するために、それなりの知識が必要と考えている。その結果、学会に参加したり、職員同士のルートで他大の情報を入手したり。その必要性から大学院に行って勉強する職員もいます。

○佐々木　立教の職員はただの事務員じゃないですよね。なかでも全カリの職員はクリエイティブな仕事をしていると思います。言われたことを、ただやるのではない。だから、専門の教員がいなくても仕事が回っているんだと思います。私も全カリ部長になって、徹夜しないと把握しきれないくらい仕事があるんですけれど、優秀な職員が補ってくれるんです。教員と職員とは専門性が異なりますが、どちらもクリエイティブに自分で考えて、発信できないと、大学のカリキュラム運営はよくならない。

○京角　全カリ立ち上げの頃に、先輩たちがその土台を創ってくれた。全カリ事務室に行くと、先生方が議論していたり、茶菓子を食べながら学会の報告をされていた

り。膨大な数の会議では押さえるところを押さえ、トラブル対応では丁寧に面談をしている。活性化された職場だなと思っていました。

それが成り立っている理由の一つには、先生同士や先生と職員とのコミュニケーションがとてもよくて、エネルギッシュで同じ方向へ向かっているからだと思います。立教の先生方は職員を上から目線で見ない。一緒にやろうと思ってくださっているのかなと。他大から来た方はびっくりされるそうですが、先生と職員の親しさがあって、よいコミュニケーションが生まれる風土がある。それが立教っぽいなと思います。

○小泉　それはいい点をついているんじゃないかな。教員と職員が平等の立場で仕事ができるというのが立教の大きな特長だと思います。でも、心配なのは働きすぎではないかということですよ。

○京角　会議は多いですね。でも立ち上げ当時の方々の働きに比べれば、少ない方だと思います。

○佐々木　当時は確かに忙しかったけれど、全体がハイテンションで流れていたからそんなに疲労感は無かったんじゃないかな。

○京角　全カリが大学の運動体ということは、例えば、FDをやればそれが学部にも伝わっていくということ。そういうことの責任や達成感はありますね。

○佐々木　シンポジウムも職員がプロデュースするんですよね。講師の交渉も皆自分でやっている。

○京角　例えば企画した講演会に参加者がたくさん来てくれたら、大きな達成感が得られますよね。

学士課程統合カリキュラムに向けて

○小泉　2016年度にはカリキュラムが大きく変わりますね。その辺りについてはどうお考えですか。

○佐々木　今後、統合カリキュラムになると、履修要項の様式から変わる。今まで全カリと専門、２冊あったのが１冊になるというイメージ。そういう形になると、学生から見て全カリという名称は見えなくなりますよね。それぞれの学部が目指すカリキュラムの一つとして位置づけられる。いままで卒業単位も全カリいくつ、専門いくつとなっていたけどそうならなくなる。カリキュラムのなかの学びの精神、多彩な学び、演習などが一つの表に並んでいく。

○京角　全カリが一つ一つの学部カリキュラムと統合していくのですね。

○佐々木　10の統合カリキュラムがある。理学部と文学部を同じカリキュラムにはできない。だから10のカリキュラムのなかで全カリと専門の区別無く、言語も総合もその学部に特化しつつ、無理なく自然に位置づけられているというイメージです。それには全カリが中心となって、各学部とカリキュラムが有機的に連携できているか検証していくのがよい。検証する場として機能していくのがよい。そうすれば、これまでの全カリの運動体としての性格を維持しながら、今まで以上に各学部を全カリに求心力を持ってひきつけて、カリキュラムを相互浸透させていくことができる。お互いに見ていいところを真似しあったり、情報交換したり。そうして統合カリキュラムは維持していけるのではないか、そう考えています。

全カリは交流の中心となる

○佐々木　いずれにしても全カリは、全学のカリキュラムの交流の中心としてあり続けなければならないと思っています。いまの時代、自分の専門性を持っていないと社会に打って出られない。何の専門も、資格もありません、じゃ、ちょっとまずい。でも、専門だけじゃ社会的な仕事も生活もできない。自分の専門はしっかりしていながら、他の専門ともつながりを持ち、共同で仕事ができないと職業人としてはやっていけない。他の専門と結びつける働きを持つのが教養だと思います。だから、専門だけではなく、教養も大事。専門性に立つ教養人を育てるべきだと思うのです。統合カリはまさにそのイメージに繋がっていくと思います。

○小泉　学部と全カリの交流という話が出ましたが、そこを仲介するのは各学部から選出されている全カリサポーターでしょうか。

○佐々木　定期的にサポーター全員が集まれなくても、ヒアリングして情報を共有するなどしていきたい。できれば、こういう場がオープンであればいいですね。

○京角　直接会ってお話しするのはやはり違います。メールだと用件のやりとりで終わってしまいますが、会って話すと違う情報が得られる。

○佐々木　全カリの関係教員は、大学に来たら１日１回は全カリ事務室に顔を出す。そういう風習が身につくといいですね。

○小泉　これからはサポーターの役割が重要になりますね。

○佐々木　全カリも先生の居場所なのです、と伝えたい。学生向けにラーニングコモンズがあるように、教員のカリキュラム運営のためにもマネージングコモンズがあってもいいのではないでしょうか。池袋キャンパスのリサーチ・イニシアティブセンターの隣にスペースがありますが、全カリにもああいう場所があるといいですね。

○小泉　全学の先生が集まれるのは全カリしかない。非常に貴重な場ですね。

○佐々木　私も、全カリを通して、たくさんの他学部の先生と知り合い、人脈が広がりました。そういう経験、いまの若い先生には少ないのではないでしょうか。顔を見て話す機会が減ってきています。全カリには柔軟な連携が非常に大切です。

○小泉　それでは、全カリの歩みから今後の展望までお話をしてまいりましたが、最後に佐々木先生にまとめていただきたいと思います。

○佐々木　時が経つにつれ、全カリの当初の精神は薄れ、忘れられていきます。万物は流転しますので、それは仕方ありません。けれども全カリ制度は昔のまま残っている。それに対する期待も一部の教員からはまだあるんですよね。だから、当初の精神を今一度振り返るのはとても大事なことです。教員たちの間に、大学に課せられた現代的課題への対処法を考える場として、全カリを再認識してほしいと思います。また、全カリを今まで維持し続けられてきたのは教職協働、とりわけ職員の働きがあったからです。それがなければもっと沈滞して形式的になっていたと思います。歴代の職員がクリエイティブに働いてくれた功績がとても大きいと私は思います。今後も教職協働をより強力に進め、立教全体を巻き込んでゆきたいです。

吉岡総長は2016年に統合カリキュラムという形で、全カリ的な運動体を全カリキュラムに及ぼそう、との方針を打ち出しています。この機会は全カリを新たに今の時代に合わせた形に再生するための絶好のチャンスなのだ、と私は思っています。

○小泉　今後も2016年に向けて色々と課題が出てくると思いますが、当初の精神を忘れず、教員と職員で協力して乗り越えていきたいですね。本日はありがとうございました。

（2014年７月４日　池袋キャンパスタッカーホール別棟打合せ室にて）

【新メンバー紹介】

全カリ総合チームメンバーとしてのご挨拶

総合教育科目構想・運営チームメンバー／法学部教授　浅妻　章如

高校時代私は文理選択に迷い、ペンを転がして文系進学を決めました。かようにいい加減な気持ちで法学部を受験したためか、法学入門科目に馴染めませんでした（幸い２年次からの法学専門科目には興味を惹かれていきました）。他方、全カリに相当するいわゆる一般教養科目は、概ね面白かったと記憶しています。特に記憶に残っているのはプログラミングに関する科目でした。プログラムは、構造に少しでもミスがあれば動きませんから、法学部で考える際にも役立っていると思います。

今、教える側になって痛感するのは、学問的誠意を保ちながら採点するのは難しいということです。学問的誠意を保ちながら採点すれば、半分以上は落第させることになります。そこまで鬼になりきれませんので、評価を甘くせざるをえません。甘く評価する傾向は、学部専門教育におけるよりも、全カリで一層強くなります。

残念ながら大学での成績は就活で重視されません。しかし、昔と比べて教科書類は充実してきておりますし、教科書に限らず教育内容や教育方法は進歩しています。それでも企業が大学での成績を信用しない理由は、成績評価が甘いと思われていることにあると推測されます。成績評価が信頼できる指標でないため、企業は重視せず、企業が重視しない成績評価を学生も重視しない、という悪循環にあると推測されます。成績評価が信頼される指標となれば、企業もそれを重視してくるでしょうし、学生も大学で勉強することが無駄であると感じなくなるでしょう。

信頼される成績評価のために、大学教員が成績評価を厳正化すべきであるとしばしば言われます。しかし、教員も人間であり情が働くので、裁量のある限りで、甘く評価する動きは止められない、と前々段落に書いたように私は考えています。信頼される成績評価のためには、それなりの制度設計が要請されると考えています。今のところ、筆記試験より信頼できる成績評価方法は未だないと私は思っています（大学入試が信頼されているのは、厳正な相対評価であるからでしょう）。分野によって話は変わってくるでしょうし、筆記試験になじまない分野もあるでしょう。しかし、少なくとも私が担当している社会科学分野では、筆記試験が重視されるべきである、と考えています（可能であれば相対評価化を徹底すべきと考えています）。

どのような仕組みが学生の能力向上に資するか試行錯誤中ですが、総合チームメンバーの任期中、うまく歯車が回る制度設計に貢献したいと思います。

全カリ総合構想・運営チームメンバー就任にあたり

総合教育科目構想・運営チームメンバー／理学部准教授　和田　亨

全カリ総合構想・運営チームメンバーに加わりました理学部化学科の和田と申します。私は2010年４月に立教大学に赴任し、まだ立教歴５年目です。正直なところ全カリの仕組みや、これまでの経緯もよく分かっておらず、チームメンバーの先生がたや全カリ事務室の皆様からご指導頂きながら勉強しております。

私は、高校時代に通っていた塾の先生がおっしゃった「一般教養科目があるからこそ大学には存在意義がある。知識と技術だけを身につけるのなら専門学校に行きなさい。」という言葉をずっと覚えています。また大学入学後、化学科の先生から「大学に入学したのだからテクニシャンではなくサイエンティストになりなさい。サイエンティストは科学だけでなく広い知識・教養がないと良い研究は出来ない」と言われました。お二方がおっしゃっていたことは「専門性をもった教養人」あるいは「教養を持った専門家」ということで、まさに立教のポリシーに合致します。以前に私は国立の研究所に勤めていたこともあり、ノーベル賞級の研究者と交流することがありましたが、世界の一流の科学者は歴史・宗教・文化にも深い教養を持ち合わせていらっしゃいました。先生がたがおっしゃっていたことを、身をもって体験し、自身の教養のなさを痛感した次第です。

全カリ部長の佐々木先生のご講演で全カリが立ち上がった経緯をお聞かせ頂き、立教の先生がたがとても高い意識をもって全カリを運営してこられたことを知りました。しかし私たちの学生時代も、今の学生達も、そこまでの理解を持って履修している人はそう多くはないでしょう。しかし、たとえ単位の為と思って履修しても、講義を聞く内にだんだんと講師の考え方に惹かれていく、あるいは違う考えを持ち始めることができれば、必ず専門にも役立つはずです。

魅力ある全カリの運営に少しでも力になれたら幸いに存じます。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

【授業紹介】

言語情報処理論（スペイン語）

兼任講師　栗林　ゆき絵

「言語情報処理論（スペイン語）」はスペイン語既修者対象の自由（選択）科目として、春学期は新座キャンパス、秋学期は池袋キャンパスにて開講されています。21世紀の現在、私たちの生活にパソコンは当たり前に存在しており、若い学生さん達にとってはスマートフォンが身体の一部といってもよいほど生活に密着しているのが現状でしょう。インターネットで世界中の情報に瞬時に触れることができる今、様々な言語の文章を画面上で見たり、文字を入力したり、あるいは音声を聞いたりすることは、ごく日常的にできるようになっています。本講義の第一の目的は、パソコン上でスペイン語の表示と入力ができるようになるだけでなく、そのしくみを理解することにあります。

またソーシャルネットワーキングサービスやネット通販等を誰もが普通に使うようになり、ネット上で各々が自分の身を守ることの重要性は日増しに大きくなっています。このような状況下で私たちがユーザーとして知っておくべき知識を、スペイン語の新聞記事の講読や、ネット上で提供されているツールの使用を通して学んでいくことが第二の目的となります。

具体的には、半期の授業を4つの単元にて展開しています。1つ目は「デジタルネイティブ度チェック」。これは情報端末やインターネットにどの程度依存しているかの判定テストで、元々はNHKの番組で紹介されていたものですが、変化の速い情報処理業界においては何を以ってデジタルネイティブといえるかの基準が時々刻々と変わっており、年度末に次年度のためのチェック項目を受講生に提案してもらい、それを翌年初回の授業で当該年度の受講生に実施してもらう形をとっています。もちろんチェック項目の文面はスペイン語ですので、スペイン語の情報処理用語を覚えるという目的もあります。

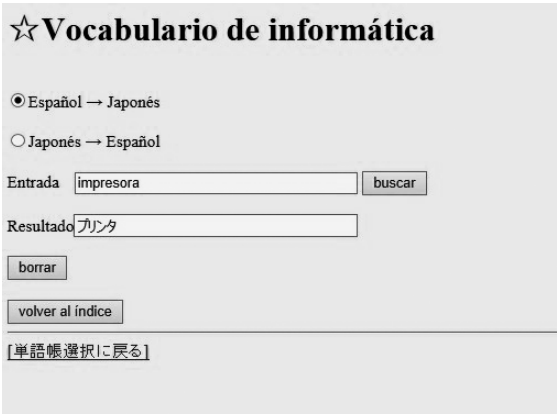
２つ目はスペイン語メールの送受信。大学のパソコンから送信したスペイン語のメールを各自の携帯端末で受信したとき文字化けが起きるか、その場合はどのように表示されるかを受講生同士で比較しあうことで、コンピュータの内部でスペイン語および日本語の文字がいかに扱われているかを理解します。

３つ目はスペイン語Web単語帳の作成です。語学の授業で習った語彙をWeb上の辞書の形にして、日西、西日双方向から検索（または単語テスト）ができるようなホームページを作成します。実際にはプログラミングが入りますが、ほぼ全員が初心者なので簡単なテンプレートを用意して文科系の学生でも抵抗なく書けるようにしています。このあたりから単なるユーザーの視点を離れ、開発者サイドの視点に立つことになり、人間の言語をコンピュータ上で処理するいわゆる「自然言語処理」入門となります。受講生の関心やレベルに応じ、動詞の原形を入力すると活用表を自動生成してくれるツールを作成する年もあります。

最後に講義のしめくくりとして、google翻訳等のインターネット上の翻訳ツールやスマートフォン用に提供されている翻訳アプリケーションの性能評価を行います。１年次に使用したスペイン語の教科書の例文や練習問題の文を学生間で分担し、「スペイン語→日本語」「日本語→スペイン語」それぞれの翻訳試験を行って訳文を○△×で評価、結果を授業中にプレゼンテーションしてもらいます。うまく行かない文については、他の受講生から「この単語を変えたらどうなるか」等の提案をしてもらい、その場で再翻訳させてみて、皆で結果を確認します。最後に正答率を出し、誤答文についてはその理由を考察するのが最終課題です。担当学生の評価の厳しさや選択文にもよりますが、過去２年間ではスペイン語→日本語は30～60％程度、日本語→スペイン語は30％程度の正答率でした。人数の多い年は、新聞記事の翻訳を担当してもらうこともありますが、案外１年生の教科書の方が出来が悪かったりします。この課題を通してインターネット翻訳や翻訳アプリの実態を知ってもらい、その使用が一概に悪いのではなく、いかにつきあっていけばよいのかを各々が判断できるようになって授業を終えてもらえれば、本講義の目的は達せられたといえるでしょう。

さらに上記４つの単元の合間に情報処理関連記事の講読も実施し、ユーザーとして必須の知識を得るだけでなく、スペイン語の情報処理用語を身につけ読解力を養います。これまでに読んだテーマは「電子メールを安全に使うための10のアドバイス」「クレジットカード使用時にやってはいけない４つのこと」「ソーシャルネットワーキングサービスにおける個人情報の扱い」等です。

盛り沢山の内容を駆け足で扱う形となりますが、各学生が情報処理環境の現状を知り、便利なものは便利に用い、危険からは身を守ることができる賢明なユーザーとなってくれることを期待しています。



Web単語帳・情報処理編（2013年度受講生の課題より）

【Web単語帳の使い方】

○スペイン語 → 日本語、　または

○日本語 → スペイン語、　を選択。

入力ボックス（Entrada）に単語を入力、

検索ボタン（buscar）をクリック、

出力ボックス（Resultado）に対訳を自動表示。

【大学教育学会第36回大会参加報告】2014年5月31日（土）～6月1日（日）於：名古屋大学東山キャンパス

教学IRによる教育改革の試み

教務部全学共通カリキュラム事務室　林　英明

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、将来の予測が困難な時代に活路を見出す原動力として、大学における教育改革の期待が高まっている。今回参加した大学教育学会第36回大会においても、各大学の教育改革に向けた具体的取り組みや研究成果が報告され、同時に熱い議論が展開されていた。

筆者の関心は、IRによる教育改革であったため、関連したラウンドテーブルと２つの部会に参加をした。IRは、Institutional Researchの略称で、学内の情報を収集し、数値化・可視化するとともに、こうした情報を分析し活用することによって教学改善や経営の意思決定に役立てようとする試みである。特にIRによる教学改善への取り組みは「教学IR」として、各大学の関心を集めているところである。

初日に参加したラウンドテーブルでは、関西国際大学の濱名篤学長による米国の大学におけるIRデータを活用した質保証の動向についての研究発表が興味を引いた。特に米国ではデータシェアリングに関するコンソーシアムの設立が進んでおり、ディプロマ・ポリシーや評価方法を設定する上で、ベンチマーキングが必要との提言があった。国内の大学のIRにおいても自大学の情報収集と分析に終わらせることなく、全国平均や他大学との比較ができるようになるまで発展させるべきであると感じた。

２日目の部会では、教学IRに関する各大学の詳細な取り組みについて、研究発表を聞き、意見交換を行った。その中でも特に愛媛大学の取り組みについて報告をしたい。

愛媛大学の事例報告では、はじめに教学IRの実践類型のモデルが提示された。縦軸はIR室などを設置する「組織化」とプロジェクトによる「非組織化」、横軸はIRの機能を「学生支援」と「教育改善」で類型化し、組織と機能の特性によって４つの類型に分類できるとのことである。ただし、機能については、仮にFDに活用するなどの教育改善型のIRであっても、最終的には学生への教育効果を高めることを目的としており、学生支援か教育改善かという類型化を明確に行うことは難しいのではないかという印象を持った。

愛媛大学では、プロジェクト型の教学IRを実施しており、教学改善の意思決定に資するデータ収集、分析、報告を行っている。特徴的だと感じたのは、分析対象とする教育目標をディプロマ・ポリシーとはせず、「愛大学生コンピテンシー」という能力目標を別に定めていることである。これにより、学部ごとに異なるディプロマ・ポリシーをより広い概念で高尚化することができているとのことであった。

さらに同大学では、教学アセスメント・ポリシーを策定し、学習成果評価の重要性を学内で共有することにより、部局に分散している各種の重要なデータ提供のハードルを下げる試みを行っており、この点は非常に参考になった。

国内の大学における教学IRの各大学の取り組みはまだ手探り状態ではあるが、当該テーマの部会に関する参加者の多さから、各大学の関心の高さがうかがえた。教学IRによりエビデンスにもとづいた教育改革への期待は、今後さらに高まることが予想される。

「教養」とは奥が深い

教務部全学共通カリキュラム事務室　飯塚　琴乃

2014年度の全カリは、2016年度開始の新カリキュラム実施に向けて、言語・総合それぞれで検討を進めている。毎週行われた総合チームミーティングでは、「学生のニーズに合わせて、より実践的な内容の科目を増やしたほうがよいのではないか」「大学での教育であるのだから、古典的な学問を学ぶことも大切である」といった議論が行われ、今期はこれからの「全カリ」＝「立教としての教養教育」を考える機会が多くあった。

さて、このような中、５月31日～６月１日、入梅直前の澄み切った青空の下、名古屋大学で行われた大学教育学会第36回大会に参加した。ラウンドテーブルは、「教養教育の本流～教養教育は生き残れるか～」というテーマの回に参加し、また、基調講演では名古屋外国語大学の亀山郁夫先生による「現代社会を生きるための教養と大学教育」という講話を聴き、学会が開催された２日間を通し、「教養教育」について幅広く学ぶ機会に恵まれた。

ラウンドテーブルでは、教養教育の歴史的変遷や日米比較などの発表に基づき、発表者・参加者による活発な意見交換が行われた。「『教養』は『自己』と『他者』を認識することができる学びであり、グローバル化が進む現代においては、世界の中で自分はどうあるべきかを知るツールとなる。しかしながら、現代の学生はそれまでの環境の中で考えることが求められず、『無思考状態』であるため、効果的な『教養教育』が求められている」ということが話題になった。全カリでは2016年度に向けて学生にとって、より効果的なカリキュラムの策定を目指している。その際、大学での教養は「学問研究」のためだけでなく、「人間形成」という側面も持ち合わせているということを忘れてはいけないということを改めて認識させられた。

また、基調講演では、ロシア文学の研究者である亀山先生の日本とロシア、独立した研究者と大学組織のトップ、というような異なるポジションをもつ自身のアイデンティティへの戸惑いに関する経験が語られた。多くの価値観が拡散している現代では、個々がもつアイデンティティは国ごとに区別できるほど単純ではない。複雑に存在する価値観の異なる他者への「共感力」を育てることがグローバル化時代に求められているといった内容であった。

本学会の２日間を通し、「教養」の幅広さ・奥深さを実感した。2016年度カリキュラムでは、各学部の先生方の協力を得ながら、全カリとして幅広く・奥深いカリキュラムを実現していければと思っている。

さて、私は２年前のニュースレターNo.32でも大学教育学会第34回大会参加報告を執筆する機会をいただいた。入職２ヶ月あまりで学会に参加し、右も左も、前すらわからない状態であったため、苦し紛れに「次回」報告する機会に期待してほしいと文章を終わらせていた。こんなにも早く「次回」が来るとは思ってもいなかったが、さて、２年前に比べて少しは成長できているのであろうか。と、自問自答しながらペンを執っている。

2014年度　全学共通カリキュラム運営センター　名簿

2014年9月現在

〈全カリ委員会〉

役職名	氏名	所属		
部長	佐々木一也	文	文	
副部長	小泉哲夫	理	物	
チームリーダー	新野守広	異	異	言語チーム
	中島俊克	済	済	総合チーム
運営センター委員	沖森卓也	文	日	文学部長
	郭　洋春	済	済	経済学部長
	家城和夫	理	物	理学部長
	奥村　隆	社	社	社会学部長
	川崎　修	法	政	法学部長
	村上和夫	観	交	観光学部長
	浅井春夫	福	福	コミュニティ福祉学部長
	石川　淳	営	営	経営学部長
	堀　耕治	現	心	現代心理学部長
	池田伸子	異	異	異文化コミュニケーション学部長
	松本　康	社	社	教務部長

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏名	所属		
リーダー	新野守広	異	異	
メンバー	森　聡美	異	異	英語教育研究室主任
	浜崎桂子	異	異	ドイツ語教育研究室主任
	小倉和子	異	異	フランス語教育研究室主任
	飯島みどり	異	異	スペイン語教育研究室主任
	谷野典之	異	異	中国語教育研究室主任
	石坂浩一	異	異	諸言語教育研究室主任

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏名	所属		
リーダー	中島俊克	済	済	
メンバー	山下王世	文	史	
	浅妻章如	法	国ビ	
	小池　靖（春学期まで）	社	現	
	安松幹展	福	ス	
	和田　亨	理	化	

〈言語教育研究室〉

研究室名		氏名	所属	
英語	主任	森　聡美	異	異
		Caprio, Mark E.	異	異
		Cousins, Steven D.（秋学期から）	異	異
		Cunningham, Paul A.（春学期まで）	異	異
		河合優子	異	異
		川崎晶子	異	異
		小林悦雄	異	異
		Martin, Ron	異	異
		師岡淳也	異	異
		灘光洋子（秋学期から）	異	異
		佐竹晶子	異	異
		髙橋里美	異	異
		高山一郎（春学期まで）	異	異
		武田珂代子	異	異
		鳥飼慎一郎	異	異
		山田久美子	異	異
		山口まり子	異	異
		山本有香（秋学期から）	異	異
ドイツ語	主任	浜崎桂子	異	異
		新野守広	異	異
フランス語	主任	小倉和子	異	異
		石川文也	異	異
		中川　理	異	異
スペイン語	主任	飯島みどり	異	異
		佐藤邦彦	異	異
中国語	主任	谷野典之	異	異
		細井尚子（春学期まで）	異	異
諸言語	主任	石坂浩一	異	異
		イ ヒャンジン（春学期まで）	異	異
		新野守広	異	異*1

*1　言語チームリーダーとの兼務

全カリニュースレター　No.36
印　刷　2014. 9. 22
発　行　2014. 9. 25
発行人　佐々木一也
編集人　飯島みどり、中島俊克
発行所　立教大学
全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　株式会社　白峰社

〈総合チームサポーター〉

	氏名	所属		グループ*2
学部選出	水谷隆之	文	日	人文学
	荒川章義	済	済	社会科学
	上田恵介	理	生	自然・情報
	橋本　晃	社	メ	社会科学
	林　美月子	法	法	社会科学
	豊田三佳	観	交	社会科学
	長倉真寿美	福	福	社会科学
	秋野晶二	営	営	社会科学
	日髙聡太	現	心	スポーツ人間
	黒岩三恵	異	異	人文学
総長任命	長島　忍	理	数	自然・情報
	石坂浩一	異	異	社会科学
	沼澤秀雄	福	ス	スポーツ人間
	松田宏一郎	法	政	社会科学
	松田正隆	現	映	人文学
	飯島みどり	異	異	人文学

*2　サポートグループ
- 人文学系サポートグループ
- 社会科学系サポートグループ
- 自然・情報科学系サポートグループ
- スポーツ人間科学系サポートグループ

全カリシンポジウム開催のご案内

「全カリにおける学習成果の把握と質保証について」

日時： 2014年11月12日（水）
18：30～20：30
場所： 池袋キャンパス太刀川記念館３階
多目的ホール

教育から学習への質的転換が求められる中、各大学においても学習成果測定に関する各種の取り組みについては、重要な政策課題となっている。特に共通教育の学習成果測定と質保証についても関心が高まっていると思われる。本シンポジウムでは、学内外で実施されている共通教育の質保証に向けた取り組みを紹介しつつ、本学の全カリにおいて学習成果を把握する意義について考える機会としたい。